

# 日本語運用能力を高めるタスクベース・シラバスの構築とその学習効果に関する実証研究：中国の大学における日本語専門学習者を対象に

李, 岸

<https://hdl.handle.net/2324/4110574>

---

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名	李 岸			
論 文 名	日本語運用能力を高めるタスクベース・シラバスの構築とその学習効果に関する実証研究—中国の大学における日本語専門学習者を対象に			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松永 典子
	副 査	九州大学	教授	郭 俊海
	副 査	九州大学	准教授	李 相穆
	副 査	九州大学	教授	大神 智春
	副 査	茨城大学	准教授	瀬尾 匡輝

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、中国の大学における日本語専門学習者の「聞く・話す」能力の向上を目指す教授法として TBLT (Task-Based Language Teaching) を取り上げ、それをローカル化 (地域に応じた実用化) するための方法論を実証的に解明するものである。

コミュニケーション・アプローチの代表的な教授法である TBLT は目標言語を使ってタスクを遂行する過程で目標言語の習得と目標言語の運用能力の向上を求める教授法だと考えられ、多くの先行研究により第二言語習得環境における指導効果が証明されてきた。しかし、中国における TBLT の実証例は乏しく、中国においてどう TBLT の実用化が可能かは明らかになっていない。そこで、本研究では日本語専攻学習者の「聞く・話す」能力を促進するには TBLT が有効であるとの観点から、中国の大学を事例に、JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境において TBLT がどうローカル化できるかを実証的な検証を通して明らかにすることを目的とする。

しかし、TBLT を中国の大学の日本語教育にローカル化するためには、現状に即した方法論の確立が必要となる。そのために、まず、TBLT でどのようなタスクタイプを、どのように配列すべきかを検討し、ローカル化したタスクベース・シラバスを開発する。また、JFL 環境で、特に学習者が同じ L1 (第一言語) を共有する場合、TBLT 授業中における学習者の母語使用に対して、教師側がどのように対応すべきかについて解明していくことが不可欠である。

具体的には次の三つの研究課題を設定した。①「聞く・話す」能力の促進を目指すタスクベース・シラバスとはどのようなものであるか。② 課題①に基づいたタスクベース・シラバスは日本語専門学習者の「聞く・話す」能力にどのような学習効果をもたらすのか。③タスクのプランニング・タイムにおける学習者の母語使用に対する教師側のコントロールは、TBLT 授業による学習効果にどのような影響を与えるのか。

研究方法としては、文献分析により TBLT をローカル化するための方法論を確立し、タスクベース・シラバスを構築した。構築したタスクベース・シラバスにより 2 回の授業実践を行い、授業を受けた実験群と受けていない統制群の間、または 2 回の実験群の間のテストの成績及びアンケート調査の結果に対して、主に SPSS による統計的な分析方法を用いて、比較分析を行った。各章の主な内容は以下のとおりである。

第1章では、本研究の背景、研究目的、研究方法及び本論の構成について述べた。

第2章では、中国の大学における日本語聴解教育の現状を学習者及び教師に対する意識調査と教科書分析によって明らかにした。まず、意識調査から日本語教育の改革とそれに伴う教授法転換の必要性を確認した。また、中国の大学で使われている13冊の中級聴解教科書を分析し、その特徴と問題点を考察した。その結果、教師の不満を解消する新たな教授法を用い、学習者が学習効果を実感できる新たな聴解授業の開発が極めて重要になることが示された。

第3章では、まず、TBLT及びタスクに関する先行研究を概観した上で、本研究における「タスク」を定義した。次に、TBLTにおける母語使用の影響、「タスクの複雑さ」が学習者の言語産出にもたらす影響、及び「タスクの複雑さ」に影響するプランニング・タイムが学習者の言語産出にもたらす影響に関する先行研究を概観した。最後に、先行研究の問題点を検討し、上述した三つの研究課題を取り上げた。

第4章では、研究課題①について、まず、認知的プロセスの視点から日本語運用能力に影響する要因について分析考察し、「聞く・話す」能力向上促進を可能とするタスクのタイプとして「アカデミック・タスク」、「意思決定タスク」を取り上げた。また、「高集約変数+低分散変数」のタスクを連続して配列する方法を取り上げ、タスクの水準、シラバスの構築手順などについての方法論を確定した上で、「日本語視聴説」授業を事例にタスクベース・シラバスを具現化した。

第5章では、研究課題②について、雲南大学で1学期のTBLT実験授業を実施し、実験授業の前後に実施したテストやアンケート調査の結果を量的手法によって分析した。実験群と統制群との比較分析をもとに、第4章で構築したタスクベース・シラバスが学習者の「聞く・話す」能力の向上に効果があったことを検証した。

第6章では、研究課題③について、雲南大学で2回目の実験授業を実施し、その結果を分析した。実験群と統制群の比較分析によって2回目の実験授業の学習効果を検証した。また、1回目と2回目の実験授業の比較分析をもとに、プランニング・タイムでの母語使用をコントロールしない場合、学習者の母語使用の割合に変化が生じ、学習者の「聞く」能力の向上にマイナスの影響を与えたことを明らかにした。最後に、第5章の結果を合わせて総合的に考察を行った。

第7章では、各章の内容をまとめ、本研究の意義と今後の課題について述べた。

上記の分析と考察をもとに、本研究で構築した「アカデミック・タスク」と「意思決定タスク」を中心に、「高集約変数+低分散変数」のタスクを連続して配列したタスクベース・シラバスは、JFL環境における学習者の「聞く・話す」能力、及び「聞く・話す」能力に対する自信を促進させる効果が期待できることが明らかになった。しかし、タスクのプランニング・タイムにおける学習者の母語使用に対する教師側のコントロールによって、その効果は左右される。特に学習者の母語使用は聞く能力の向上を促進しない可能性が示唆された。以上の結果を踏まえ、中国の大学における日本語専門学習者の「聞く・話す」能力向上を図るために、「アカデミック・タスク」と「意思決定タスク」のような「複雑さの高いタスク」の連続で配列したタスクベース・シラバスによるTBLTは有効であるが、その有効性を生かすためには、プランニング・タイムにおける母語使用に対する教師側のコントロールが必要であることを明らかにした。

以上のように、本研究はJFL環境下で日本語を習得していく学習者の言語産出に影響する要因として、タスクの複雑さやその配列、タスク活動における母語使用といった要因があり、特に「聞く」能力の促進を母語使用が阻害することを実証的に解明している。これらの点において、本研究の知見は外国語教育における教授法研究の方法論に貢献をなし得るものとして、博士(学術)に値する価値ある業績であると判断された。